

氏名	かわ うち まさ よし 河 内 将 芳
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 65 号
学位授与の日付	平成 11 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
学位論文題目	中世近世移行期における都市社会史の諸相 — 16 世紀京都を中心に —

(主査)

論文調査委員 教授 下坂 守 教授 狩野博幸 助教授 河上繁樹

論 文 内 容 の 要 旨

近年のわが国の都市史研究によれば、近世の町についてはこれを「地縁的職業的身分共同体」と定義すべきことや、家屋敷所持・役負担におけるフラット性が指摘され、また、中世でも権力との関係を中心に町の生成過程が検証されるなど、都市の歴史的な成り立ちとその基盤が次第に明らかになりつつある。

しかし、この二つの時代を結ぶ16世紀については、史料的な制約もあって従来より実証的な研究が少なく、その結果、都市史研究は大きな断絶を生むに至っている。本研究はそのような現状に鑑み、中世から近世への移行期としての16世紀を対象として、京都の都市としての実相を多角的に検証しようとしたものである。検証にあたっては、都市民衆の活動を職能、宗教・信仰、地縁の三つの側面から取り上げ、これを分析するという方法を用いている。

都市民衆の職縁の様相について論じた第一部では、まず土倉・酒屋として知られた角倉一族を取り上げ、その経営が土倉としては大覚寺および愛宕社・清凉寺の篤い庇護を受けていたこと、また酒屋としては自らが醸造酒屋を経営するだけでなく紙屋川から以西では他の酒屋・請酒屋をも従属下においた、きわめて強大な酒屋であったことを論証する。いっぽうその他業種への進出についても言及し、灰屋による紺灰座の支配の事例とも合わせ、土倉・酒屋がその経営で蓄積した資本をもって、さまざまな商・手工業座の座頭職・公用代官職を獲得し、十六世紀の京都において、他業種の商・手工業座を支配する体制が出来上がっていたと結論付けた。また、これに対する商・手工業座側については、古くは法座の違反者に座自らが制裁を加えていたのが時代が下がるとともに権力の力を借りるようになったという事実を指摘し、商・手工業座側にも土倉・酒屋の進出を許す要因が内在したと判定した。

第二部では、宗教・信仰の様相を示すものとして、京都の都市民衆の間に広く浸透していた法華信仰に焦点を絞り、それが町・町組・惣町のありようなどどのように関係していたかを考察した。最初に富裕層の法華信仰の一例として、京都でもっともよく知られた中興の営んだ柳酒屋を取り上げ、関係史料の詳細な検討から、同家が柳酒屋の経営に携わったのが通説とは異なり鎌倉時代ではなく、遙かに時代の降った応仁の乱以降と推定されること、したがって同家の法華信仰についても再検討されるべきとした。

ついで都市民衆による法華信仰の実相を探る方法として、京都の法華宗の本山寺院16カ寺が下部の諸寺から資金を調達するにあたって作成した、天正4年(1576)の「諸寺勸進帳」を取り上げ、その分析を通じて経済的側面から、従来の特定の寺院・僧侶とそれに帰依する個人という師檀関係が、16世紀には大きく崩れていたことを検証した。また、信者の都市民衆の方でもこれに呼応する形で、町・町組・惣町を紐帯とした組織編成が進展していたという事実を関係史料より検出した。

さらに、このような都市民衆の法華信仰の変容がどのような経過を経て近世寺院の本末制度、寺請制度にまで進展していったかについては、文禄4年(1595)に豊臣秀吉が始めた東山大仏千僧会に着目、その草創と執行形態を分析し、これが世俗権力のもとでの諸宗の統合・再編成に画期的な役割を果たした法会であったことを実証した。

第三部においては、史料上に登場する「上京地下人」「下京地下人」という呼称を取り上げ、その実態を探るなかで、彼らが惣町の指導的集団を指し、具体的には上下京の土倉・酒屋をその主体とした存在であったことを論証した。また、彼らが中心となって毎年執行されていた風流踊りの実態と変遷を検証するなかで、その特権的な階層性を明らかにするとともに、彼らの周辺部には排除された多数の都市民衆が存在していたことを明らかにした。最後に彼らが織田・豊臣政権下で認められた地子免除という特権が、近世には「御朱印預」「御朱印虫払」という年中行事として町で確認・継承されていたという事実を論証した。

論文審査の結果の要旨

第一部において最初に取り上げた角倉は、近世初頭における了以・素庵による朱印船貿易や、高瀬川・保津川の河川改修工事で著名な一族であるが、その中世における酒屋としての活動については、これまでほとんど知られるところがなかった。本論文では、新たに発見した史料をも駆使して、角倉の16世紀における活動を詳細に検証することによって、当該期の土倉・酒屋の経営実態を明らかにするとともに、その歴史的な課題を明確にすることに成功している。また角倉一族については、了以・素庵らが一族の傍系であったという事実を初めとして、新知見を数多く提出しており、高く評価される。

いっぽう商・手工業者座については、座法の分析から座が本所を介さずに直接、権力の支配下に入っていたという指摘は、彼らが後の織田政権による楽座を受け入れざるを得なかった歴史的な要因の一つを明確にしたものであり、当該期の権力と商・工業者との関係を考える上できわめて貴重な指摘といえる。

柳酒屋を経営した中興に関する従来の研究の反省に立って、町・町組といったより大きな集団単位で、都市民衆の信仰形態の実相を掌握しようとした第二部では、近年、発見された「諸寺勸進帳」という法華宗関係史料を基本史料として用いている点が、特に注目される。ともすれば宗教史の枠内に限って使われることが多かったこの種の史料の活用は、都市史の研究に新たな視角と方法をもたらすと考えられるからである。

また、ここで検出された、それまで寺院・僧侶単位で組織されていた法華信者が、16世紀後半以降、法華宗という宗門に所属することになり、それと平行して信者組織が町・町組を活用したものになっていくという事実は、これまで看過されてきた都市民衆の宗教・信仰活動の新たな一側面を明らかにしたものと高く評価される。

さらに本論文のもっとも斬新な点は、このような法華宗を初めとする諸宗の変質を、近世寺院における本末制度・寺請制度との関わりにおいて位置付けた点にある。文禄4年(1595)、豊臣秀吉によって始められた東山大仏千僧会については、これまで本格的な研究がなく、そのため大仏殿をもって当初は方広寺と呼ぶことがなかった、という基本的な事実すら未確認であった。本論文では、この法会の実態を断絶に近世初頭に至るまで丹念に追うことで、これが諸宗の統合・再編成を目的として権力によって組織・実行されたものであったことを、きわめて明快に論証している。中世から近世への移行期を研究対象とした本論文の大きな成果の一つがここにある。

第三部における都市民衆の地縁の様相の究明においては、これまでたんに惣町の上層部を指す言葉と理解されてきた「上京地下人」「下京地下人」といった呼称が、土倉・酒屋を中心とした特定の上層の都市民衆を指す言葉であったことを、数多くの事例をもとに検証し得たことは、大きな成果といってよい。土倉・酒屋が、町・町組さらには惣町において占めていた地位がこれによって明らかとなった。また、風流踊りという、従来、芸能・民俗史の分野からしか取り上げられることのなかった事象に着目し、その歴史的な変遷を追うことで、これが町組の上層部によって担われた風俗であったことを論証したことは、都市民衆が有していた階級性を具体的に示した点において貴重な成果といえる。

以上のように、本論文の内容はきわめて多岐にわたるが、中世から近世にかけての移行期としての16世紀という時代に焦点を当て、都市民衆の実相を職能、宗教・信仰、地縁という三つの観点から総合的に解析しようとした試みは、その独創性において評価されるのみならず、巧みな史料操作によって幾多の新たな歴史的事実を明らかにすることに成功している。また、都市に伝来した各種の古文書を史料として活用するにあたって、その近世における継承の実態を明確にした点は、文化財としての古文書の保存・伝承に関する新知見を明示したものであり、高く評価できる。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成11年2月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。